

## 飯島賢二の『恐縮ですが…一言コラム』

### 第 476 回 巨星墜つ！ 江口恒明氏を偲んで

2012.6.10

業界のオピニオンリーダーたる「観光経済新聞」社長の、江口恒明氏が亡くなった。観光経済新聞は、旅館・ホテル、旅行会社など観光業界のプロ達が購読している週刊の専門紙であり、旅行のプロが選んだ温泉ランキング「にっぽんの温泉 100 選」を年に1度発表。「5つ星の宿」の認定も行っている。発行部数 59,000 部を誇る、業界最大の専門紙である。江口氏はこの会社を昭和 25 年 4 月に創立して以来、現役の社長としてパワフルに活躍していたゆえ、突然の訃報に驚き、戸惑っている。

昭和 54 年、「旅館の商品開発シリーズ」としたコラムの連載が始まった。中小企業診断士とはいえ、わずか28歳の若造に、その機会を与えたのは、江口社長の英断だった。その連載は5年間続き、112 回で終了した。僕が直接江口社長とお話できた、最初のエピソードである。

毎週紙上で、クリエイティブな商品の提案を繰り返すのは、正直辛かった。アイデアが出ず、夜も寝むれず、頭を叩きながら徹夜を繰り返した。何回も書き直してはゴミ箱へ、こんなことを日常茶飯事にやっていた。パソコンはもちろん、ワープロもない時代、僕の右手の中指には一人前に「タコ」ができた。この「ペンだこ」は、今でも申し訳ないように残っている。

何度辞退しようかと思った。しかし、その都度思い浮かんだのは、あのぶっきら棒な口調で…、「いつ止めてもいいよ」という江口社長の一言だった。実はこれが、僕の最大の励みになった。今から33年前の話である。

この連載は後で小冊子としてまとめてくれ、観光経済新聞社で発刊してくれた。僕の名前で発行した、初めての単独著者としての出版物となった。「旅館商品」、「気配り商品」、「会議商品」等、知的所有権は取得しなかったが、この連載で初めて使った言葉であった。苦しみ抜いて提案した 112 のアイデアは、旅館の現場で生きているものが沢山ある。そんな場面に遭遇した時、あの苦悩が一瞬のうちに歓喜に変わった。僕の、コンサルタントの基礎はこの5年間でできたといえる。

江口社長の英断と励ましがなかったら、この喜びは得られなかった。江口社長は僕の、最高の恩師に間違いない。業界の巨星墜つ！突然の訃報に接し、江口社長への恩返しとして、心に残る数々の教えを忘れまいと今、自身に誓った。